

中学生の部 最優秀賞

南北の貧富の差が地球環境を悪化させる

佐々木 珠莉 さん
(志津川中学校 2年)



「大切な資源を大事に使い、環境保全に努めたいと思います。」

私はこの題を見てショッキングな見出しだと思いました。一読して、南北の貧富の差ってどんなことだろう。それが地球環境の悪化とどんな関係があるのだろう。と疑問がわきました。これと同時に洞爺湖サミットの事も頭にうかびました。たしかサミットのテーマは地球環境温暖化を防止するための温室効果ガスを削減する具体的な規制を決めることだったはず。ところが、共同宣言には、規制値が示されなかったのです。それなのに、先進八ヶ国の合意として開発途上国に対して排出量を減らすことを要求していたのです。この要求に対して開発途上国の代表者達が地球温暖化の責任は北側にあるはずだ。とても承服できない。と反論していたのです。この事を下敷にして本文を読んできていくと、工業先進国(北)と開発途上国(南)の間には、生活水準に大きな格差があり、その差はどんどん開いていて、地球環境問題の差があったのです。世界人口の約五分の一にすぎない先進国が世界の半分の食糧と八パーセントのエネルギーを消費して自分達だけの豊かな生活を支えて来たのです。なぜこんなことが許されて来た

のでしようか。私は、とてもいらだちを感じます。現在、南と呼ばれている国の大部分は、第二次世界大戦前までは帝国主義のもとの植民地だったのです。これらの国は独立するまで数百年にわたって侵略者である欧米諸国から木材や鉱物などの天然資源をうばわれ続けてきたのです。南の人々は、北からの侵略に立ち向かうすべもなく、とり合えずその日その日を生き抜くために働き続けたのでした。ガーナの子どもたちは、一日中カカオの実を摘みとる仕事をしているが、その製品であるチョコレートを口にする事は一生ないだろうと言われてきました。なんて、ひどい生活なんだろうと思います。そのチョコのかけにかつてはこのようなできごとがあったとは、想像できませんでした。先進諸国の豊かな食卓には食べきれない食品があふれているのに南の子ども達は、飢えに苦しんでいるのです。肉類の消費量を比べただけでも先進国は開発途上国の約五倍、アフリカ地域の約七倍と言われています。こうした状態の中で、南の国は国内体制を整備し経済的に自立しなければなりません。そのためには、自分達の生活を支えてい

る自然環境を使わざるを得ないので。森林が少なくなっていくとしても木材を切り出して売っていかねければならないし、さらにそれを切り開いて畑にしなければならぬし、自分達が食べる作物ではなく外国に輸出してお金に換えるためのフルーツなどの作物を作るようにしなければならぬのです。どう考えればいいのでしょうか。私は、この本を手にするまでは、毎日、食卓にいろいろな料理が並べられるのを何とも思いませんでした。ごく、普通のことだと思っていました。私はエビが好きです。ところが、このエビ養殖のために東南アジアのマングローブ林が破かいされ続けられていたのです。タイのマングローブ林は、一九六一年に三十九万ヘクタールあったのが一九八八年には実にその五十パーセント近くが失われてしまったそうです。日本人のエビ好きがマングローブ林を食いつくしてしまつたのです。北の美食のために南の環境が失われると言っても過言ではありません。どんな事をどうしていったら、北も南も満足できるのでしょうか。私の頭では答えを見つけないでいます。今、日本では開発途上国へ

お金や技術、人材を提供していません。ところが、それが本当に貧しい人たちのためになっているかどうかは疑問になっています。自然資源を管理する対策に欠ける」「有害物質の排出管理、公害防止基準の設定が日本国内に比べて低過ぎる」などといった批判が強いそうです。このような批判がなぜ出てくるのでしょうか。「援助してやるんだ」という高ぶった気持ちでどこかにひそんでいるのではないのでしょうか。人工衛星から地球を見ると、年々緑を減らし砂漠を広げているのは、南の地域であることがわかります。このことから環境破かいは南の問題だと多くの北の国が思ってしまうのは、まちがいだと思います。南で起こっていることは北の責任であることが少なくないと思います。大国と言われている先進国の人たちが自分たちの生活と産業のあり方を、地球規模で考え直さなければ、問題解決につながらないと思います。

書名：新・今「地球」が危ない
著者名：学習研究社(編集)
出版社：学習研究社

小学生高学年の部 最優秀賞

「平和の種をまく」を読んで

小島 明沙美 さん
(志津川小学校 6年)



「主人公のエミナのように、自分も何ができたらいいなあと思います。」

「昔、日本でも戦争でたくさんの方が死んで、辛くて悲しい思いをしたの、そんな人達がいたおかげで今の平和な暮らしがあるんだよ。」というおばあちゃんの言葉を思い出しながらこの本を読みました。エミナの住むボスニアでは、となり合つて暮らしていたちがう民族が敵どうしになり、大きな戦争が起きました。三年半の間に二十五万人以上の人々がぎせいになったそうです。山のように埋められた家族の遺体を墓地に埋めようとする写真を見て、ただ恐ろしさで体がふるえました。ふつうの人は、だれも戦争なんてしなくなつたのに。とても悲しくて心が痛みました。戦争が終つて十年以上たつて今でも、人々の心には傷が残っているし、苦しい生活をしながら地雷の恐怖とも戦っているのです。戦争の前と同じように、安心して他の民族達と交流し、

取かくした作物を分かち合えるコミュニティ・ガーデンでは、楽な生活ではないのに、みんなの笑顔がなんて素敵なのだろうと思えました。エミナとちがう民族のナダもここで出会い良い友達になりました。そこで一生懸命に働くエミナ達の姿を見て、私はとても恥ずかしくなりました。楽なことばかり考えたり、もつといい物がほしいと思つたりと、とてもわがままだなあと反省しました。そして、今の生活が十分に幸せなことなのだ改めて気がつきました。エミナの強さと素敵な笑顔はどこからくるのだろうと思えました。それはきつと、貧しく苦しくても平和に暮らせる喜びを知っているからだろうと思えました。私は、戦争の本当の恐ろしさを全然分かっていなかったのです。この本を読んでから、戦争で心の傷に悩む人達に対して、自分出来る事はないだろうか、と思うようになりました。そんな時、本屋で目に止まつたのが、「地雷ではなく花をください。」という本でした。この本を買つたお金は、地雷の除去のために活用されるそうです。私はすぐに、おこづかいでこの本を買いました。それでも助かつてくれたら。と思つたからです。

エミナやナダ、そしてみんなの素敵な笑顔がこれからもずっと続いてくれるよう、絶対に戦争はしてはいけないと思えました。民族や考え方が違つても、平和で幸せな毎日を送れる事は、世界中のみんなの同じ願いだと思います。争う姿より助け合う姿の方が、ずっと素敵で美しいことだと思います。コミュニティ・ガーデンの人達のように。そして、戦争のぎせいになつた人達のためにも、もう二度と戦争で無駄に命を落とす人が出ない事を強く強く願います。私達一人一人が仲良く暮ら

す事が、戦争をなくす第一歩ではないかと思えます。エミナとナダのように平和の種をまき広められるのは、私達人一人なのですから。

書名：平和の種をまく
著者名：スニアの少女エミナ
出版社：岩崎書店